



## 本当に開かれた学校とは

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

2月26日の北海道新聞「釧路・根室版」に、前日に実施された国公立大学前期日程の2次試験の様子を伝える記事が掲載されていました。北海道教育大学釧路校は地域学校教育実践専攻の54名を募集しましたが、出願者は前年度より31名少ない109名だったそうです。倍率は前年度比0.6ポイント減の2.0倍とのことでした。釧路校の卒業生は小学校教員になる者が多いですが、この数字を見る限りでは、大げさかもしれませんが、小学校教員のなり手不足の改善には至っていないようです。

近年では、小学校教員免許状を取得できる私立大学が急増しています。また、多忙さについても、小学校教員はほぼ全教科を教えるため、息が抜けない面はあるものの、文部科学省の勤務時間調査では、部活動がある中学校ほど深刻な状況ではありません。

それでは、なぜ小学校教員のなり手不足が改善しないのでしょうか。読売新聞編集委員の吉沢由紀子氏は、「保護者対応の難しさ」が大きな要因であると述べています。確かに、子どもの間のトラブルなどを発端に、過剰な要求をする保護者への対応で疲弊し、消耗する教師がいます。そんな状況を先輩の話から知った学生が、小学校を「大変な職場」と敬遠してしまうケースもあるのではないのでしょうか。

保護者への対応は年々、困難さを増しているように感じます。ある小学校の校長から次の話を聞いたことがあります。

「特に小学生は幼く、状況をうまく伝えられないことから情報が錯綜しがちになり、保護者が心配のあまり子どもと一体化してしまう傾向もあります。その結果、実に様々な要求を受けることになってしまう」

誰が見ても理不尽な要求であったり、脅迫めいた言葉を浴びせられたりした場合は、躊躇せずに弁護士や警察に相談すべきと考えますが、そうでない場合は、学校に苦情を言うてくる保護者を一括りに「モンスターペアレンツ」と見るべきではないと思います。

前述の吉沢氏がある大都市の教育委員会が校長を対象に開催した「保護者対応」の研修会に参加したところ、講師は「とにかく話を問題からそらしてください」と勧めたそうで、衝撃を受けたと述べています。そして、参加していた多くの校長は、うなづきながら聞いており、保護者の要望に先入観なく耳を傾けてくれるのか、心配になったそうです。

その一方で、学校法人渋谷教育学園理事長の田村哲夫氏は、渋谷教育学園渋谷中学高等学校の校長だったとき、「保護者の苦情は宝」と常日頃から教職員に伝えていたそうです。そして、田村氏は子どもの居住地ごとに週末、「地区懇談会」を開き、校長自らが聞き役になって保護者の意見を聞きました。懇談会で出た意見は教職員に確認し、保護者の誤解があれば、学校経営方針を丁寧に説明しました。このような取組が風通しのよい学校経営に繋がりました。

本校が「本当に開かれた学校」になるためには、これまで以上に、多くの保護者の皆さんの声（意見）を聞かせていただく必要があるということを実感しているところです。



田村哲夫氏